

庚申塔と「さいの神」

厳島神社境内に三基の庚申塔が立っています。一番大きい舟型の塔は鎌倉市で最も古い庚申塔の一つで一六七〇年に建てられ、鎌倉市指定有形民俗資料になっています。上部に阿弥陀三尊の梵字が、中央に願文が、下部には「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿が彫られています。となりの尖頭角柱の塔は、上部に日月、中央に庚申供養塔、下部に三猿が彫られ、一八〇〇年に建てられました。更にとりなる駒型の塔は、中央に青面金剛童子と刻まれ、塔が建てられたのは一八六〇年です。青面金剛は仏教で庚申信仰の本尊とされています。三基の庚申塔とも施主の名と小袋谷村と市場村（台村市場地区）の名が刻まれていますので、この庚申講中は小袋谷と市場の人達で構成されていたようです。

庚申信仰は元は中国道教に由来するものですが、日本に伝来して仏教や神道と習合し、更に山王信仰や日月信仰などの民間信仰とも習合しいろいろな要素を持つようになりました。そして庚申の申は干支で猿に例えられるので三猿が彫られていることが多く、同じ理由で猿田彦神が神道で庚申の祭神とされています。その猿田彦神は道祖神（さいのかみ）としても信仰されていますので道祖神信仰とも結びつきました。また庚申信仰には除災や塞ぎの要素があり道の神としての性格を本来持っており、庚申塔は今、社寺に移されまともに置かれているものが多いですが、元は村の境や道の集まる所に立っていたので、道祖神の石塔の一種と

いう解釈もあります。民俗研究では、鎌倉には道祖神塔がない地区でも道祖神信仰はあったそうです。

小袋谷には昔「さいの神」という小字名がありました。さいの神は古来より道祖神の和名とされています。その小字名は一六七八年の検地帳にも出てきます。現在、小袋谷公会堂がある辺りを「さいの神」と記した文書があるそうです。厳島神社にある庚申塔も、元はこの辺りに立っていました。それらの石塔が立っていた庚申塚を「さいの場」とも呼んでいたそうです。「さい」とはさいとやき（道祖土焼）の略語で、昔は鎌倉市のほとんどの地域で、今どんど焼きとか左義長と呼んでいる正月行事のことを「さい」と呼んでいました。

十八世紀末に作成された浦賀道見取絵図を見ると、庚申塔があった近くには観音講の道標や吾妻社など、そして鎌倉道の分岐点があり台村と結ぶ水堰橋があります。更に高札もありましたので、村の中心の場だったようです。